三菱UFJビジネススクエア

SQUET スケット

September 2010
9

平成４年２月３日第三種郵便物認可
平成22年９月１日発行（毎月１日発行）通巻249号

特集

人を動かす「質問力」

三菱UFJリサーチ&コンサルティング

にんげん模様

フラメンコ舞踊家

平富恵（よしえ）

激しく力強い舞踊表現を求めて始めたフラメンコ。
舞踊の技術を突き詰めて身につけた心の表現を、
作品づくりを通して未来の舞踊家たちに伝えていく。

文◎鎌田 淳司　写真◎佐伯頼光

心の表現であるフラメンコの魅力を一人でも多くの人に伝えたい

足を打ち鳴らす踊りがしたくてフラメンコに

『SQUET』は五〇代、六〇代の中小企業経営者がよく読んでいると話したら、「最近はフラメンコの公演に、年配の男性も多くいらっしゃるんですよぉ」と、目をキラキラ輝かせた。

「フラメンコはいくつかのパートを組み合わせて起承転結をつくり、歌、ギター、踊りの三位一体で楽しむもの。人間の情念を素直に表現するのでわかりやすく、観る側も感情移入しやすい。初めてフラメンコをご覧になった方も、楽しかったと言ってくださいます」。

美しさの奥に凛とした強さを持つ顔立ち。迷いなく真っすぐに伸びる身体と、しなやかに動く腕と指先。フラメンコに注いできた情熱の強さが、平富恵の全身に表れている。

フラメンコを始めたのは学生のとき。いっしょにやろうと友人にずっと誘われていたが、小学生の頃よりバレエを始めた平には「暗くて重い」イメージがあって、その気になれずにいた。ところがある日、テレビで小松原庸子の舞台を見て、目からうろこが落ちた。「日比谷の野外音楽堂で毎年やる『真夏の夜のフラメンコ』でしたが、三〇人ぐらいの大群舞に強烈な印象を受けたんです。フラメンコって、こんなに華やかで明るいものなのっ！　これなら私もやりたいって。翌日には先生のスペイン舞踊研究所に入門しました」。

第8回研究所発表会での「アレグリアス」

ちょうど自分の将来、進路について考える時期。平もこのとき、このまま踊りというものを続けていって、プロの舞踏家としてやっていけるのか悩んでいた。トップクラスになれないのなら、別のジャンルに行くほうがいい。頭に浮かんでいたのは、フラメンコとタップダンスだった。

「足を打ち鳴らす踊りをしたいという漠然とした願望があったんです。バレエはずっとつま先で立っていないといけないでしょ。足をギューッと伸ばし続けていないとならないのです。小さいころからずっとそうやって、足を鳴らしちゃいけないって言われ続けてきたから、その反動だったのかも（笑）。もし、そのとき小松原先生のフラメンコではなく、タップダンスのすごいステージを見ていたら、そっちに進んでいたかもしれません」。

バレエの下地があったから、クラスの誰よりも早く踊りを覚え、めきめき上達した。ピアノも一〇年以上習っていたので指が自由に動き、カスタネットもすぐに叩けるようになった。だからレッスンが楽しくてしょうがない。新しいステップをどんどん覚え、貪欲に吸収していった。四〜五年するとソリストとして、劇場公演に出るまでになっていた。

スペイン人に必死で食らいつきフラメンコの心を身につけた

何もかもが順風満帆だったわけではない。小松原が渋谷に開いていたタブラオというフラメンコ・レストランに出演していた五〜六年間は、忍耐の日々だったという。

スペインから呼んだグループの歌と演奏で本場のフラメンコを見せる店に、スペイン語もろくにわからないうちに放り込まれた。何をどのように踊るか本番前に打ち合わせるのだが、そのやりとりすらおぼつかない。最初は親切に応じてくれるメンバーたちも、慣れてくれば手厳しい。なかには日本人が嫌いという人も。そんなときは、バカにされたり、いじめられたり。

「いじわるされて逃げ出す子も、過去にはいたんですよ。でも私は何を言われても平気でした。とにかくしゃべらないことには始まらないので、スペイン語を懸命に覚えて、自分が言いたいことをぶつけた。本能的にここでは絶対に逃げちゃいけないって、必死で食らいついていきましたね（笑）。

当時、本場のプロが伴奏し、歌ってくれるような機会は、このステージ以外には、スペインに行かない限りなか

ったんです。昔ながらのフラメンコでしたけど、そういう経験ができることはとてもありがたかったし、勉強になりました。踏みとどまってよかったなと思います」。

その忍耐がやがて、大きな成果につながった。二〇〇二年のマルワ財団主催CAFフラメンコ・コンクールで優勝し、翌年、スペインで開催されたカンテ・デ・ラス・ミナス国際フェスティバルの権威あるコンクールで、審査委員長特別賞を受賞したのだ。

踊ったのは「シギリージャ」という古い曲。バタ・デ・コーラという長いスカートにカスタネットを持つ伝統的なスタイルで踊った。

「とても難しいスタイルで、最近ではスペインでも、できる人が少ない。だから舞台に上がるまでは、どんな風に評価されるのか不安でしたね。しかもその日の一番手で、会場もざわついていたから集中できず、あっという間に終わっちゃった。自分の印象も、いつものことを普通にやったという感じでした。それでも翌日、ホテルのロビーでコンセルバトリオ（舞踊師範学校）の先生たちが『昨日最初に踊った日本人はすごくよかった、素晴らしかった』と話しているのを聞いたとき、安心してうれしくなりました」。

その後も平は「シギリージャ」を踊り続け、いまではソロで踊った回数がいちばん多い十八番になっている。

自分を磨き、人を育てて
美しい作品を生み出したい

約一〇年前に平富恵スペイン舞踊研究所を設立し、東京・神田にスタジオも構えた。いまはそこで、フラメンコを踊りたい女性たちに教えている。

「趣味として踊りたい人、セミプロのレベルを目指す人など、フラメンコへの向き合い方は生徒さんそれぞれですが、自分自身の心の表現として踊るように指導しています。みんなで楽しくフラメンコを踊るのもいいのだけれど、その中からプロの舞踊家になる人も出てきてほしいですね。そのためにも公演をしていこうと思っています」。

かつては自分が踊ることだけに全精力を注ぎ、そのために必死で技術を磨いた。経済的に不利であっても、有利な仕事を選ばず、それがいま必要なことだと考えてやってきた。でもその時期を過ぎたら、いい作品をつくり、優れた舞踊家を育てたいと考えるようになった。作品とは踊りの振り付けだけでなく、歌、音楽、絵的なものも含めたすべて。古典的な詩や物語、絵画などをモチーフにして、舞台芸術にまで昇華させていく。

舞台で一緒に踊れる人が育てば、自分のアイデアを形にする自由度が広がる。同レベルで踊れる人が何人いるかで、作品で表現できることも違ってくる。だから一人でも多く育てたい。

この一一月に行う公演では、スペイン古典舞踊の作品を新しい形にして踊る。そのためにいま、出演する生徒たちに厳しい稽古をつけているところだ。もちろん、自分にも大きな課題を与えた。「シギリージャ」をデュエットで踊ろうと考えているのだ。

「私が師事した男性がソロでやっている『シギリージャ』を見たら、あまりにも素晴らしくて、ぜひデュエットで踊りたいと申し込んだんです。先日一回目の稽古をしたらすごく難しくて、どうなっちゃうんだろうって感じでしたね。ずっと踊り続けてきた得意な曲をまったく別の形でやるのは、大きな挑戦だと思っています。失敗しちゃうかもしれないけど、新しい何かが見つかるかもしれないなって」。

初めてフラメンコに取り組んだとき、いちばん気にしたのは「一生努力するに足るものか」ということだった。いま平は心の底から、フラメンコを踊ることが生きることだと思っている。

（文中敬称略）

かまた・じゅんじ　一九五二年、兵庫県生まれ。早稲田大学文学部卒業。書籍編集者、雑誌記者を経てフリーランスに。人物や企業の取材執筆活動を行っている。

たいら・よしえ
東京都出身。1988年、小松原庸子スペイン舞踊研究所に入門。97年スペインに留学。2002年スペイン舞踊振興マルワ財団主催のCAFフラメンコ・コンクールで優勝。翌年、カンテ・デ・ラス・ミナス国際フェスティバルのフラメンコ・コンクールで日本人初のセミファイナリストとなり、審査委員長特別賞を受賞。06年同舞踊団を退団後は、平富恵スペイン舞踊研究所を主宰し、後進の指導にあたる。クラシック、三味線、和太鼓など他ジャンルのアーティストとの共演も多く、TVやラジオだけでなく、CMイメージキャラクターなど、幅広く活躍。09年10月、スペイン舞踊活動20周年記念公演を開催した。今年9月、最も権威のあるスペインのビエナル・フェスティバルで公演を予定。11月には草月ホールでリサイタルを開催する。
www.girasolflamenco.com